平成３０年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）の推進事業」成果報告書

団体名	高石市教育委員会

Ⅰ　概要

１　選択したテーマ

テーマ	取組項目	選択
①交流及び共同学習を継続的な取組とするために、教育課程への位置付け等、組織的かつ計画的な取組の在り方に関する研究	（ア）通常の学級に在籍する全ての児童生徒等に交流及び共同学習の機会を学校として計画的に実施するための方法に関する研究	○
	（イ）障害のある児童生徒及び障害のない児童生徒等が、交流及び共同学習を通じ、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むために、交流及び共同学習のねらい、事前学習と事後学習、年間指導計画への位置付けの効果的な工夫に関する研究	○
	（ウ）通常の学級の担任などの教職員が主体的に交流及び共同学習に取り組むための体制整備の在り方及び教職員の意識向上に関する研究	○
	（エ）ＩＣＴを活用した交流及び共同学習に関する研究	○
②学校間交流や居住地校交流等を進めるための関係する教育委員会との連携の在り方の研究	（ア）特別支援学級が設置されていない小・中学校における学校間交流を推進するための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	（イ）高等学校おける学校間交流や居住地校交流を進めるための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	（ウ）学校間交流や居住地校交流等を進めるための市町村教育委員会と都道府県教育委員会又は市町村教育委員会と市町村教育委員会の連携に関する研究	
	（エ）居住地域の小・中学校等に副次的な籍を置くなど、居住地域との結びつきを強める工夫に関する研究	
③障害のある大人の人との交流や地域における高齢者等の世代を超えた交流の在り方に関する研究	（ア）障害のある大人の人との交流に当たり、福祉部局や社会福祉法人等と連携したネットワーク形成に関する研究	
	（イ）教育委員会と地域の関係者による「心のバリアフリー連絡協議会（仮称）」を設置し、取組状況や実施体制などの成果と課題について協議するなど、地域に心のバリアフリーの意識を啓発し根付かせるための研究	
	（イ）高等学校の生徒や特別支援学校の高等部の生徒が、継続的に地域の障害のある大人の人との交流をするための方策に関する研究	

２　事業の概要

(1)教職員の研修
・大学の教員による研修会「共生社会につながるアダプテッド・スポーツ～ボッチャの体験を通して～」の実施
(2)児童生徒へのパラリンピアンや障害者アスリートによる講演会
・上山選手（パラアーチェリー）による講演
・髙田選手（ゴールボール）による講演
・山本選手（陸上）による講演
・吉見選手（ボッチャ）による講演
(3)障害者スポーツ（ボッチャ）を介した「交流及び共同学習」の実施
・モデル校の３小学校における支援学級児童と通常の学級の児童との交流及び共同学習
(4)ICT を活用した交流及び共同学習
・ICT 支援員と連携して教材の開発
・タブレット等 ICT 機器を活用した視覚支援教材等を用いた交流及び共同学習の実施
(5)専門家による巡回相談・研修会の実施
・大学の教員による巡回相談 4 回・研修会 2 回

３　事業の成果

(1)教職員の研修について

障害者スポーツを通しての交流及び共同学習を進めるにあたって、夏期休業中に教職員向けにアダプテッドスポーツについて研修を実施した。障害者や高齢者、運動の苦手な人に適応（adapt）させることで、「できない」を「できる」に変える考え方やその人自身と、その人を取り巻く人々や環境をインクルージョンしたシステムづくりこそ大切であるという考え方を指導いただいた。実施後、参加した教員からは、「いろんな個性を持つ人への社会の懐の深さに繋がるようにその考えを心に留めて、学校でも子どもに関わっていきたい。」や「アダプテッドを考える活動を通して、仲間はずれや出来なくて悲しい思いをする子も減り、みんなが優しくなれそうな気がする。」などの感想があがった。理解や考え方をより一層深める機会となったとともに子どもへの接し方のヒントや授業づくりの参考になった。

(2)障害者アスリートの講演会について

小学校では、パラリンピアンやトップアスリートによる講演会を実施した。そのスポーツとの出合いやパラリンピック出場までの経緯等体験をもとに「前向きに考え努力することで何事にも挑戦できる」ことを伝えていただいた。また、中学校では、モデル校を卒業した選手を招いて、講演会とボッチャを通しての交流を実施した。中学校時代の悩みや本音の部分からその後ボッチャに出合って生き方が変わった事など、身近な先輩の話に興味・関心を持って聞くことができ、児童生徒の感想の中に「ここが限界だと思って途中で諦めてしまうことがあったので、これからは限界と思って諦めずにがんばっていきたい。」など、話を聞いてこれからの生き方について見つめる機会となった。

(3)障害者スポーツの体験を介した「交流及び共同学習」の実施について

モデル校の対象学年の各クラスが、ボッチャを通した交流を実施した。特別支援学

級在籍の児童やけがをしている児童もいたが、全員が活躍することができた。また、体験の後に障害者スポーツについての共同学習を行った。スポーツを楽しむために工夫していることやそれぞれの人の個性に合ったスポーツが考え出されていることも教えていただき、障害者スポーツについて理解を深めることができた。「目が見えなくても、耳が聞こえなくても、車いすの人でもみんな人間だから、みんなが支え合ったら絶対にスポーツを楽しむことができると思う」や「いろんな障害があってもいろいろ工夫したら一緒にスポーツできると思う」などの感想や、事業実施前と実施後のアンケートの結果からも児童の多様性を尊重する意識の高まりが見られた。この体験の後、特別支援学校の児童とボッチャを通しての居住地交流をしたり、校内でボッチャ大会を開いたりするなど各学校で普及することができた。

(4) ICT を活用した交流及び共同学習について

ユニバーサルデザインの観点やわかりやすい指導方法の工夫等について、市の ICT 支援員と連携して個に応じた教材開発をめざし、研究に取り組んだ。タブレット等 ICT 機器を効果的に活用し、共同学習をすすめることができた。

(5)専門家による巡回相談・研修会の実施

大学から講師を招き、障害のある児童生徒が、通常の学級で授業を受けている様子について巡回相談を受けた。通常の学級担任は、その子の特性や支援の工夫について指導助言を受け、個に応じた合理的配慮の基礎的環境の整備について学校全体で取り組むことができた。

4　事業の課題とその解決のために必要な取組

・モデル校では、「スポーツを通しての交流及び共同学習」を継続･発展させていく基礎を築くことができた。しかし、他校には取組方のノウハウ等が広がっていないのが課題である。今後は、モデル校以外でも広げていくために、モデル校でのボッチャを通した交流や「できない」を「できる」に変えるためのルールの変更やてだての取組を支援教育担当者会等で発信していくことや、モデル校で実施した障害者スポーツの体験を介した「交流及び共同学習」を大学の出前授業講座プロジェクトを活用して、費用負担の軽減を図り、取組を進めていきたい。

・モデル校では、タブレット等ICT機器を効果的に活用し、共同学習をすすめることができた。しかし、ICT機器を活用した共同学習の授業づくり研究は、個々の教員にとどまっており、継続的な研究までは至っていない。市のICT支援員と連携しながら教材開発を進め、モデル校でのICT機器を活用した交流についての研究を継続し、普及を図りたい。また、ICT機器を活用した効果的な共同学習の普及を図るために、研修を市で実施していく予定である。